

2021年(令和3年)度
AO 英語検定型入学試験[B日程] 問題
海外帰国生徒入学試験[B日程] 問題
国際バカロレア入学試験[B日程] 問題
小 論 文

2020年11月19日 実施

【解答上の注意】 答えは別紙解答用紙に、左横書きで書いてください。
この問題用紙の余白や裏面を下書きなどに利用してもかまいません。

《課題文》

人間個体は生命有機体であるだけでなく、シンボル、とりわけ言語を用いるという特別の種類有機体である。人間個体はシンボルの意味を学習し、それをメディアとして用いることにより、他者および自分自身とコミュニケーションし、彼の行動、彼の思想、彼の感情をシンボリックに規制する。わたしは個体のこの側面を、行為者(actor)と呼んでいる。行為者は生まれるのだろうか？ 有機体が生まれるのと同じ意味で行為者が生まれるのではないことは、明らかである。しかし人間の子どもの発達の一部は、社会化(socialization)とよばれる漸次的で複雑な過程であり、パーソナリティはそれによって形成される。他者に対する関係のパターンの学習、言語の学習、環境に対する関係に関して自分自身の行為を処理する構造化されたやり方の学習が、この過程の中心に位置している。

それでは、パーソナリティは死ぬのだろうか？ 有機体とパーソナリティの共生は非常に密接であるから、人間の意味でのパーソナリティが子どもの生命有機体と独立に発達するなどということは考えがたく、したがって人間のパーソナリティは同一人の有機体としての死を超えて長生きすることはできない、と考えるのが妥当である。しかしながら因果関係としては、もしパーソナリティが経験的実在であるなら、それは有機体すなわち人の「身体」に起こることに影響するし、その逆もまた真である。極端なケースは自殺であって、自殺は癌による死などとは異なり、なんらかの「動機」なしに、純粹に身体的な過程として説明できるものではない。しかしより一般的に言えば、多くの死、すべての病気、その他さまざまな身体的事象には「心的」要因がある、と信すべき理由がある。

人間であれ人間以外の動物であれ、個体有機体の生存能力には自己限界がある、というのは確かな事実である。不都合な環境的条件がとくになくても、「加齢」の過程において種々の有機体的能力に漸次的な障害が起こり、それらの障害が積み重なって死に至る。有機体の死は医療によってくい止め得るとしても、その全部をくい止めることはできない。個人の行為-パーソナリティ要素(action-personality component)についても、身体的要素の場合ほど明解な証明はできないとしても、原理的に同様のことが真であると信すべき理由がある。その意味するところは、さまざまな複雑な諸要素が、加齢とともに、バランスを維持するのに必要な能力を喪失し、それがついには崩壊へとつながっていく、ということである。有機体の死を伴わなくても、パーソナリティ機能が事実上停止するという事例があることが、これらのことを示唆している。より一般的にいうと、もし精神病(mental illness)という現象が実在して、それは有機体過程の単なる随伴現象ではないとするならば—わたしはそのように確信しているが—、それらのあるものは有機体の死とは一部独立にパーソナリティの死をもたらすほどに強い、と考えるのは理の当然である。

すでに述べたように、有機体レベルにおいて人間個体は単独で存在しているのではなく、無限(infinite)ではないが不定(indefinite)な持続性の世代間連鎖をなしている。その最も顕著なものが、種(species)である。個体有機体は死ぬが、もし彼/彼女が子孫を残せば、「線」は将来世代へと続いていく。この世代間連続性は、個体の出生から死に至る連続性と同様に、生命の事実なのである。

行為の側にも、直接の並行関係がある。個人のパーソナリティは、人間個体の有機体とともに成長して共生関係を「生成」し、そしてその有機体とともに死ぬ。しかし個人のパーソナリティは、二つのレベルにおいて、個人を超えた行為システムの中に埋め込まれている(embedded)。社会システム(最も顕著には全体社会)と文化システムがこれである。行為の側における個人パーソナリティと社会-文化システムはともに個人の行為によって「担われ」ており、有機体の側における体細胞原形質(somatoplasm)と生殖細胞質(germ plasm)はともに個人有機体によって「担われ」ている。両者のあいだの関係には、密接なアナロジーが成立する。かくして、個人パーソナリティがその中に埋め込まれている社会文化的「母型」(sociocultural matrix)は、個体有機体がその中に埋め込まれている個体群-種の母型(population-species matrix)の、重要な意味における対応物(counterpart)である。

有機体レベルでは、有機体個体は死ぬが、種は連続して「生命を持続する」。同様に、個人パーソナリティは死ぬが、社会システムと文化システムは持続し、個人パーソナリティはその生命の一部である。私はこの並行関係を、単なるアナロジー以上のものと考えている。

(T.パーソンズ著；富永健一〔ほか〕訳『人間の条件パラダイム』より)

《問題》

課題文を読んで、以下の指示に従って答えなさい。

- (1) 社会文化的「母型」が、個体群-種の母型の重要な意味における対応物であるとはどういうことかについて、200字以上300字以内で解答欄①に書きなさい。
- (2) 次の問いへの答えを、300字以上500字以内で解答欄②に書きなさい。

問：上記問題(1)で示した「重要な意味における対応物」を身近な具体例に置き換えて説明せよ。

2021年(令和3年)度
AO 英語検定型入学試験[B日程] 問題
海外帰国生徒入学試験[B日程] 問題
国際バカロレア入学試験[B日程] 問題
小 論 文

2020年11月20日 実施

【解答上の注意】 答えは別紙解答用紙に、左横書きで書いてください。
この問題用紙の余白や裏面を下書きなどに利用してもかまいません。

《課題文》

機械は労働の反復から偶然の揺れをほとんど完全に排除し、同時に素材や身体の抵抗も克服して、労働の受動的な側面を徹底的に除去する仕掛けであった。それは労働の個性を無効にし、自然環境や歴史的背景をも超える力に富み、それゆえに広域の世界に伝播して生活を均質化する動因になりやすかった。さらにテクノロジーは行動の目的が過程を支配し、理性が身体を服従させる方法であったが、この方法はやがて社会の運営にも適用された。合理的な法や制度が整備され、社会運営の予測可能性は顕著に高まったのだが、常識はこうした歴史的变化を文明化と呼んでいるのではないだろうか。

一般化していえば、リズムの図式的な側面を抽象化して固定し、人間の行動から受動性を極限まで排除したとき、そこにはつねに文明化が始まるといえるだろう。工業化はもちろんその劇的な一例であったが、原理的には文明化への傾向は広く歴史を超えて見いだすことができる。いいかえれば文明化とは行動の観念的な制御のことであるから、それは最初の成文法の成立、最初の体系的知識の成立とともに、世界のいたるところで始まったと考えてよい。暦法や占星術、通貨や度量衡の制定、広域宗教の戒律、さらに規格化された道路や都市建設の様式も文明の原初的なかたちであった。それらは個人との関わりにおいていえば、知的に理解できれば十分な拘束力を発揮し、必ずしも慣習的に身につけなくても服従できる規制として与えられる。「吉日」を選ぶには暦を読めばよいし、穀物の分量を正しく知るには、枡という物体化された規範に頼ることができるのである。

自然から文化へ、文化から文明へというこの三段階の移行は、音楽や舞踊を例にあげると誰の目にもわかりやすい。まず感情の発作的で一回かぎりの身体発現、奇声を発し、文字どおり「手の舞い、足の踏む所を知らぬ」躍動を見せるのは、もちろんまだ文化とは呼べない。やがてそれが一定の旋律や振り付けを帯び、反復可能なリズムが形成されたとき、初めて文化としての音楽や舞踊が生まれるが、これはまだ個人や小集団の身体の記憶のなかに留まっている。しかしそこから一步出て、運動が楽譜や舞踊記譜法によって記録されると、これはその読みかたの技術とともに文明の領域にはいることになる。もっと端的に音楽にかぎっていえば、演奏家の身についた指のリズムは文化であるが、それを機械化したメトロノームの拍節は文明なのである。

だが一端が自然に発し、他の端が文明化の極に達して、その間に広大な文化の領域を形成しているものといえば、それは何よりも言語である。言語が自然からどう発生したかを考える余裕はないが、現存する言語のなかには発作的な嘆声に始まり、文法構造と概念的学術語に終わる、漸層的な意識化の発展のすべてが含まれている。そしてその中核を占めるのは陰影の揺れを帯び、微妙な文体上の含蓄を表現する、いわゆる日常語と文学的言語の世界である。そこでは用語選択の的確さ、文法順守の厳密さが求められるとともに、その意識を感じさせない発話の流暢さ、文字どおり流れるような文体が要求される。また言語はその論理性ゆえに普遍化の力が強く、他に類を見ない広域の人びとを統一するという点で、文明の性格を持つ。だが他方でそれは身についた慣習性の程度も高いために、他のどんな文化的行動よりも繊細に個人の個性を表現する。たんに自然と文明の両極に渉る領域の広さのみならず、両者が両義的に対立する緊張の強さの点でも、言語こそ誇張なく文化の頂点に位置するといえるだろう。

もちろんこの三段階は広く日常のなかにも見られ、たとえば食事という生活文化も自然と文明の中間に成立している。けだし自然の生理的な食欲は消化反応の産物であり、胃の食物がなくなれば不随意的に起こるはずである。現に草食動物はたえず食べ続けるし、肉食動物は胃がからになるまで次を食べようとしない。だが人間だけは一定の間隔をおいて規則的に食べることを始め、いつしかその回数と時刻を文化的に規制するようになった。現代人はおおむね日に三度の食事を摂るが、中世には二度しか摂らない風習も広く見られた。そのさい面白いことに、風習はたんに社会の規制として成立しただけではなく、それが確立されると人間は一定の時刻に自然に空腹を覚えるようになった。規制は意識的に作られたが、やがて個人の身についたくせに近いものになり、あたかも自然現象のように発現するようになった。意識的な制度と生理の受動性が統一されたという意味で、人間の食欲もまた文化としてリズムの構造を持ったのである。

(山崎正和著『社交する人間：ホモ・ソシアビリス』より)

《問題》

課題文を読んで、以下の指示に従って答えなさい。

- (1) 筆者の言う「リズム」とはどういうことか。200字以上300字以内で解答欄①に書きなさい。
- (2) 次の問いへの答えを、300字以上500字以内で解答欄②に書きなさい。

問：ここで述べられている文化と文明の違いについての議論を踏まえたうえで、言語学習を通じて文化を学ぶことがどういった点で重要であるかについて述べなさい。